

中央アジアとその周辺の宗教文化 VI

早 田 啓 子

前稿^{注①}に引き続いて、中央アジアとその周辺地域の仏教を中心とする文化について述べていく。

前稿ではソグド文化の中心地アフラシアブとヴァラフシャについて述べ、さらにフェルガナ地方のクワやアフシケントについて言及した。今回はこれまでに扱ってきた中央アジアの宗教文化について、さらに詳説且つ補足しておきたい箇所について記していく。

ヘダルヴェルジン・テパ

この遺跡^{注②}については、既に拙稿で概略を述べたのであるが補足しておきたい。アフガニスタンとウズベキスタンとの国境を分けて東より流れてきたアムダリアは、テルメズでスルハンダリアと合流し西へと流れている。ダルヴェルジン・テパは、このスルハンダリアの右岸に位置する遺跡で、中世にはこのスルハンダリア中流地方はチャガニアンと呼ばれていた。スルハンダリア地方にはテルメズ(咀蜜國)、チャガヤナ(赤鄂衍那國)、カルーン(忽露摩國)、シュマン(憐漫國)、クワヤーナ(鞠和衍那國)等の国々が含まれる。

七世紀初頭、中国からインドへ求法の旅を続けた玄奘は、ダルヴェルジ

ン・テパが存在したチャガニアン地方について『大唐西域記』の中で次のように言及している。

咀蜜國。東西六百餘里。南北四百餘里。國大都城周二十餘里。東西長南北狹。伽藍十餘所。僧徒千餘人。諸窣堵波即舊所謂浮圖也。又曰鑰婆又曰塔婆。又曰私鑰簸。又曰藪斗波。皆訛也。及佛尊像多神異有靈鑒東至赤鄂衍那國／赤鄂衍那國。東西四百餘里。南北五百餘里。國大都城周十餘里。伽藍五所。僧徒尠少。東至忽露摩國／忽露摩國。東西百餘里。南北三百餘里。國大都城周十餘里。其王奚素突厥也。伽藍二所。僧徒百餘人。東至憐漫國／憐漫國。東西四百餘里。南北百餘里。國大都城周十六七里。其王奚素突厥也。伽藍二所。僧徒寡少。西南臨縛錫河至鞠和衍那國／鞠和衍那國。東西二百餘里。南北三百餘里。國大都城周十餘里。伽藍三所。僧徒百餘人。東至鑊沙國^{注③}

これによるとチャガヤナには伽藍は五箇所あって、僧徒の数は少なかったようだ。同じくスルハンダリア地方でも、テルメズの記述には「伽藍十餘所。僧徒千餘人。諸窣堵波即舊所謂浮圖也。」とあるように、仏教が盛んであった様子が窺える。もっともテルメズは地理的にいってもスルハ

ンダリアの中心的な都市でもあったし、ガンダーラからアムダリアを渡って真っ先に仏教が上陸してくる土地であったと考えられる。

玄奘が記しているチャガニアン^①の五箇所の伽藍の中に果たして、ダルヴェルジン・テパが入っていたかどうかは、はっきり分らないが、少なくともアラブが侵入するまでは、この地では仏教が篤く信仰されていたと考えることができるであろう。

ダルヴェルジン・テパは、テルメズの北方90 kmに位置する、広さ650 m × 500 mという広大な遺跡である。仏教がガンダーラからアムダリアを渡って、スルハンダリアに伝搬してくるのは紀元一世紀の頃である。まずは政治・経済・文化の集積センターであったテルメズに上陸し、間をおかず周辺の諸都市へと伝搬していったものと考えられる。ダルヴェルジン・テパは、スルハンダリアという天然の要塞に守られて繁栄していたに違いない。また、この地は地理的にいっても当然諸民族が往き交った交通の要衝であったために、ゾロアスター教、マニ教、ネストリウス派キリスト教、ユダヤ教その他の土着的な宗教など、様々な宗教が信仰されていたし、仏教もその中の一つであった。さらにいえば、仏教は思想内容もさることながら、何より人間の現実生活上の「技術」面や現実的利益を担った宗教であったことを強調したい。技術というものは、現実的な側面を持ち人間にとって普遍的なもので、どこで誰が取り扱っても同じ結果を生み出すものである。仏教はこの技術的側面を高度に持ち合わせた宗教哲学であったことが、例えば儒教などと違うところである。中央アジアを往き交ったソグド商人達に仏教の信者が多いのも、それを物語っている。彼らは仏教という宗教思想に抱き合わせるかたちで、実生活上極めて有用な技術を運んだ旅の商人であった。このようなことがらに関連して杉山二郎氏は、

単なる厭世哲学や実践倫理の思想を説いても、平等と慈悲を説いても異国の風土環境の違う世界の人たちのハートを捉えることは難しかったろう。(中略) 人種の如何を問わず身分の貴賤を問わない宗教としての魅力は一部の往来する人たち、またオアシス住民のハートに訴えたに違いない。けれど、それだけでは大衆動員は果せなかったろう。どうしても現世利益と即効魅力がなくては叶うまい。^{注④}と述べられている。

ダルヴェルジン・テパはウズベキスタン南部のスルハンダリア州にある都城遺跡で、スルハンダリア河の右岸に沿っている。スルハンダリアは、「中央アジアの大河アムダリアの右支流の一つで、その広い河谷は、北はギッサール「ヒッサール」山脈(最高⁴⁶⁴³m)、東はババタグ山脈(最高²²⁹⁰m)、西はバイスタウ山脈(最高⁴⁴²⁵m)とクギタングタウ(クフ・イ・タングタウ)山脈(最高³¹³⁹m)にかこまれ、南はアムダリアをへだててアフガニスタンに接している」^{注⑤}。

アムダリアのアムとは、アムダリアの下流に栄えたアムル都城のことで、ダリアはトルコ語及びイラン語で河や海を意味する言葉である。

スルハンダリア州の中心都市はテルメズで、夏は40度を超すこともある。降雨量は少なく、平野部で年間130 mm ~ 330 mmなので良質の綿花を産する。また州の南部ではこの地方特有のアフガネツと呼ばれる乾いた南西風が吹く。パフサと呼ばれる粘土ブロックで固められたストゥーパ等の建造物も、南西方向のドラムの部分が、砂を含んだ南西風によって長年の間に損傷しているものがカラ・テパに存在する。

スルハンダリア流域は、北部バクトリアの領域である。ダルヴェルジン・

テパの意味とその発音について加藤九祚氏は、

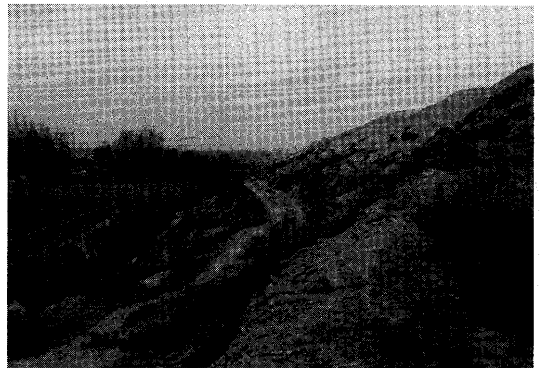
「ダルヴェルジン」または「ダルヴァルジン」という地名は中央アジアにいくつもある。その意味について、A・R・ムハマドザノフ(Mukhamadzhonov)はアラブ語の dal (tail) は丘、イラン語の var は砦、zin は土地の意で、「丘の上の砦」を意味するという。^{注⑥}

と定義されている。これをモンゴル語の立場から解釈すると、

S・K・カラエフ(Karaev)は(中略)ダルヴァルジンをタジク人はディルヴァルジンと発音する。アフガニスタンのバルフ州にディルベルジン、キルギスタンにドルボルジュンという場所がある。カラエフはK・K・ユダキノフ(Yudakinov)から教示されたとして、ダルヴァルジンがモンゴル語のドルバルジン(dorbalzhin)(四角形)に由来するとのべている。これは時代とともに、場所によってディルベルジン(dilberzhin)・ディルバルジン(dilbalzin)・ダルヴァルジン(dalvarzin)などと発音するようになった。^{注⑦}

と述べておられる。テパは粘土でできた建物の廃墟で、丘状に盛り上がっている状態を指す。中央アジア方面では建築用材として古来、粘土やパフサを用いてきた。一つの文明が起こり、それが廃れるとそこは廃墟となって土地が盛り上がる。そういったことが何代にも亘って繰り返されると丘状の地形を形成することになる。それをテパと呼んだのだ。

さてダルヴェルジン・テパであるが、面積は47haでシャフリスタンと呼ばれる都城で、南側にはツィタデリと呼ばれる内城(写真①)がある。内城はグレコバクトリア時代にはツィタデリのみ小さな都市であったが、



写真① ダルヴェルジン・テパのツィタデリ

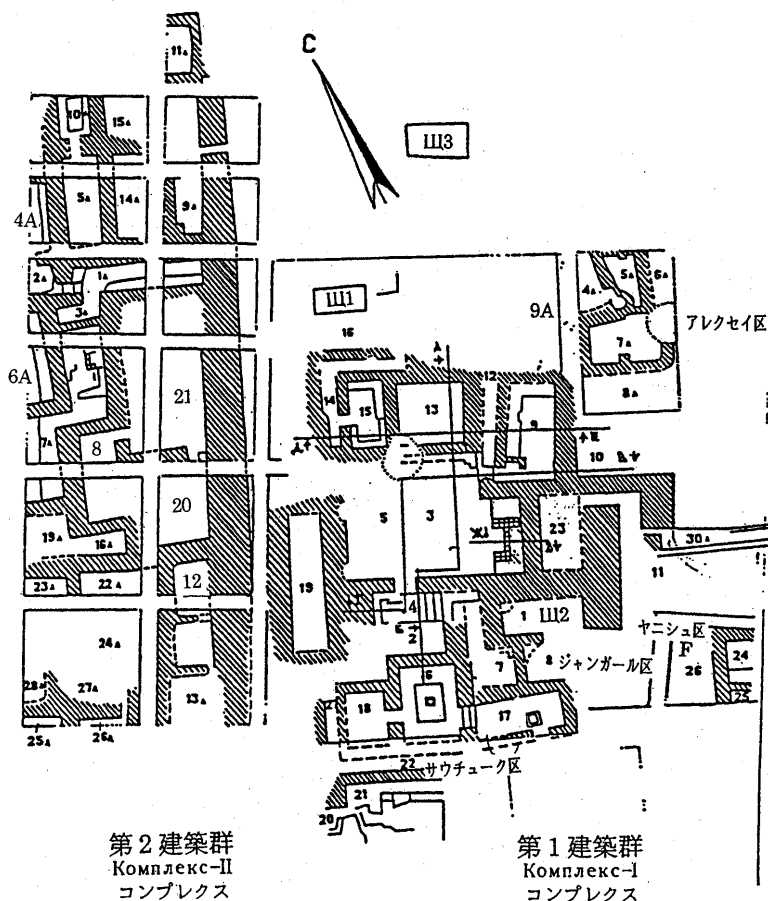
た端正な顔の青年の像である。この寺院の成立は一世紀末から二世紀と考えられる。

仏教はアフガニスタンを經由してガンダーラからバクトリアに伝搬する。紀元一世紀末の頃である。域外のDT1の寺院では、供養者の彫刻も多かった。当時、この地は様々な宗教に彩られていた。新参の仏教はDT1寺院のように、まず域外の仏教寺院で定着が図られることになったものと考えられる。

それからさらに二百年ほど経ち、仏教がこの地に根付くとシャフリスタンの内部に仏教寺院が建てられたものと考えられる。DT1と違ってDT25の第二仏教寺院は壮麗な寺院と彫像で占められている。民衆の間に、より一層仏教が浸透していったものと考えられる。

さて、今回はDT25と呼ばれている城内の寺院について、その報告書^{注⑧}を援用しながら拙稿^{注⑩}で触れていないことも含めて詳しく見ていきたい。筆者

紀元前一世紀頃シャフリスタンを含む大きな都市へと発展したことが分かっている。ここには二つの仏教寺院があつて、既に筆者が拙稿^{注⑧}で記したDT1と呼ばれる寺院は域外の北方400mの綿花畑の中にある。ここからは有名な「三角帽子を被った青年」が出土している。筆者はこの像をハムザ記念芸術学研究所で拝見した。飾りの付いた特徴的な三角錐の帽子を被つ



図① ダルヴェルジン・テパDT 25平面図 (部分)



写真② 遺跡にあるイスラム教の墓 (写真上部)

が二〇〇〇年十一月にこの遺跡調査を行なった時は、遺跡の上に多くのイスラム教の墓が造られており、発掘不可能な箇所も多く存在していた。(写真②)

ダルヴェルジン・テパの北の居住区の一角に発見されたのが実はこのDT 25第二仏教寺院である。この発掘に際しては二つの建築が重層になっていることが分かって

いる。即ち、下部の文化層の上に仏教遺跡の構造が載っているというものである。下部は住居の跡で、パフサと日干し煉瓦が使用されている。

DT 25では現在のところ十五室の発掘がなされている。建築は第一建築群と第二建築群(図①)に大きく分かれている。第一建築群のほぼ中央にある3号室をルサノフ(D.V. Rusanov)は次のような理由によって内庭であると見なしている。

第一に、9 mの空間を平らな屋根で覆うためには直径0.33 mを下回らない木製の梁を1 m間隔で建物に配置していかなければならないことが計算上示されている。(中略) この構造は非常に大規模で高くつくため、それが採用された可能性は小さい。第二に、3号室の床にはより一層軽い屋根を支えることのできる柱礎の痕跡すら見られなかった。第三に、3号室南壁に直径10~15 cmの孔が発見されている。それらは、ほぼ1 m間隔で配置されており、多分それらは片持ち梁構造による木製の小さな梁の痕跡であろう。その下には本尊が安置されていたことであろう。これらの梁に支えられた屋根は幅の広いものではなく、多分、水と中央アジアの強い太陽から塑像を守っていたのであろう。^{注①}

ルサノフはこの部屋が片持ち梁構造になっていたと判断している。片持ち梁であれば当然屋根を覆う材料は軽い素材でなければならない。通常は梁に棒が掛けられて、その上を編んだ葦で覆い、さらにその上に粘土を載せるといった方式をとる。この場所では瓦は全く発見されていないので、恐らくそのような屋根がこの内庭に付設されていたと考えられる。さらに南東側の壁には、幅1.8 m、奥行き1.6 mの龕が造られており大きな座像が安置されていた痕跡と多くの彫刻の断片が発見されている。この部屋について

て加藤九祚氏は次のように述べられている。

この部屋は建築群全体の中で最も重要であったと考えられる。ここには大小多くの彫像があり、一部は故意にこわされ、一部は床に倒れていた。水準点から2メートルの深さに、すでに多くの彫刻断片がみられ、(中略)部屋の中央の床の上に日干煉瓦と焼いた煉瓦の列があったが、これも儀礼的な目的のものかも知れない。^{注⑩}

こう見てくるとこの3号室は事実上の内陣であったとも考えられる。3号室の東北隅には9号室へ通じる通路がある。この壁は白とバラ色に塗られていた痕跡がある。9号室の広さは7.5m×3.9mの長方形の部屋で、入り口の所に前室が設けられているのが特徴的である。このような形式を備えているものは他にカラ・テパやペンジケントにも残っている。この前室は、何のために造られたのであろうか。その理由をルサノフは次のように説明している。

その役割は部屋を外から視覚的に遮るものである。この壁のお陰で日中の光が入り込むことを抑え、9号室にいくらかの機密性を加えることを助けたのである。前室の壁には炉があり、そこでは永いこと火が炊かれており、そのことは土が激しく焼けていることで明らかだ(中略)部屋内部の床には何度も使用されたような痕跡のない多数の灯明皿が逆さに置かれていた。埋土の中から塑像の石膏や粘土片、またこの部屋をかつては飾っていた壁画の断片が発見された。(中略)この部屋が祭祀の執行と関係していたことははっきりしている。それゆえ、特に暗くした部屋で灯明皿を捧げ火を灯したのである。おそらく、訪

問者は入り口で灯明皿を買い、前室の炉で火を灯して、部屋の中央にそれを置き、段に座って仏陀について瞑想した。^{注⑪}

この部屋には粘土で造られたスーファと呼ばれる長椅子がしつらえてあった。西側は1.65m×0.65m、北側は90cm×95cmの幅の粘土の長椅子であった。また南側に塑像が安置され、壁面も一面壁画で覆われていたと想像される。入り口から入る僅かな光と灯明に映し出されて浮かび上がる室内の像や壁画の数々は、信仰をより篤く確かなものとし、民衆を仏の世界へと導く手段として尚一層の効果をあげていたに相違ない。室内では灯明を灯し香を焚き、献花をし、一連の儀式を執り行なって仏を讃歎したものであろう。宗教儀礼を盛り上げるためには宗教心理学的にいつても、闇は不可欠の要素である。世界各地で行なわれている宗教的な行事や祭りが、暗闇の中で執行されていることを想像してみるとよい。

ルサノフが指摘していたこの9号室の壁画の断片について、加藤氏はその制作方法を次のように考えられている。

草と粘土を混ぜて壁を塗り、その上からうすく粘土、ついで石膏を塗って描かれていた。主として青、黒の地に暗赤色の絵具で植物の芽とか縁飾り、あるいは赤地に白い円や半円が描かれていた。白地またはうす赤の地に描かれた仏陀の正面図もあった。別の断片には耳飾りと冠帯をつけた若者が描かれていた。光背もあった。衣服のひだのある胴部と2つの腕輪をつけた断片も発見された。^{注⑫}

家屋の壁を造る時と同様に、まずパフサ状に強度の基礎を造りその上から薄く粘土や石膏をかけてキャンバスとしたようだ。絵の具の青はラピス

ラズリ、暗赤色は自然石のバーントシェンナーであったろう。自然の中で絵の具を見つけ出すことはさほど困難なことではない。しかし、ラピスラズリは別である。古代にあってはアフガニスタンで産する大変貴重な宝石で微細に砕くことによって、色目が薄くなっている。

この壁画のレベルは質的に優れたものであった。プガチェンコフ (G.A. Pugachenkova) を中心とするグループは次のように述べている。

Decoration of the temples, palaces and living houses include also wall paintings. They have been left only in fragments; it is still possible, however, to judge their high artistic perfection and the diversity of themes. Divine images and ritual scenery are found in fragments from a temple of the Great goddess at Dai'verzín, and in one of the wealthy living houses were found fragments with the profile of a warrior in helmet, while in another were part of a female face and a sharp-clawed paw of the Gryphon. From fallen remnants of paintings in the Khalachayan palace were discovered effigies of a Hellenistic featured man, a boy of the Central Asian type, and a woman with elevated coiffure. Both in the palace and temple of the goddess, there were also diversified ornamental panels and borders. On several of them were rendered clearly Hellenized motifs, such as palmetos and laurel twigs, while others revealed the textile designs of sprouts, foliage and flowers.

The wall painting left in small fragments in the temple inside

of the town, is traditional: the heads of Buddha in nimphuses, ornament motifs of lotus, and foliage.^{注⑮}

次に13号室について見ていこう。ルサノフによるとこの部屋は内庭に面しており床面は内庭と同じレベルであると考えている。さらに興味深いこととして次のことに言及している。

この部屋の発掘時に床面で植物の腐敗層が検出された。多くの仏教文献では献花や花綱について語られている。(Litvinskii, Zeimal, 1971, p.22-23)。また、花を置くと思われる場所も示され、さらに、枯れて萎れた花を片づけなければならないことも言及されていた。

史料ではまた大量に持ち込まれた花に関係して、花を受け取るには比丘の特別な許可が必要であったと述べられている。花はヴィハラー (Vihara) の決まった場所に置かれた (Litvinskii, Sedov, 1983, p.23)。おそらく13号室はまさにこのような役割をもっていたのである。^{注⑯}

中央アジアの仏教寺院では、このようなヴィハラーで献花や各種の供え物をしていたのであろうか。ここでの供え物は、他に金品なども当然捧げられていたものと考えられる。献花された花は、捨てずにその部屋に置かれて厚い所ではその層は30cmもの堆積物となって腐敗した残存層となっていた。ルサノフは、献上物を捨てないのをゾロアスター教の影響と見ている。同様に2号室についても、

そこでは内庭礼拝堂への入り口の前で床に掘り込まれた貯蔵庫が発見された。その壁は漆喰で白く塗られており、そこは灰で満たされていた。

注⑦
た。

儀式用に使用した残灰がこの2号室に溜めておかれたのであろう。となればこの内庭を挟んで13号室と2号室さらには9号室の機能を考え合わせると、まさにここがDT25第二仏教寺院の中心的役割を果たした場所であることが分かる。つまり3号室に安置されていた仏像を礼拝し、献灯、献花をして、一連の儀礼はここを中心として行なわれていたと考えられる。さらに、この13号室の西隅には、ゴミ穴になって破壊されてしまっていたが、通路があったことが推測される。

14号室と12号室の用途としては北部地区へ通ずる内庭であったと推測される。ルサノフはDT25の仏教寺院とカラ・テパの建築群Bの類似性を指摘している。方向性は考慮外としてその類似性として次の点を挙げている。

- ・ 内庭の一方の壁面には主軸に沿って中央の龕がある。(3号室)
- ・ 内庭の第2の壁面には通路によって内庭に面した一連の部屋がある。
- ・ 第3の壁面は実際何の隙間もない。
- ・ 第4の壁面には別の建築群への通路と上へ上る階段がある。^{注⑧}

以上の点はDT25の3号室の構造とカラ・テパの平面図を比較するとよく理解できるであろう。(図②・図③)

さらにルサノフは第一建築群の9号室とカラ・テパ建築群Bの類似性についても次のように指摘している。

- ・ 内庭の角に位置すること。
- ・ 部屋内部を外側から視覚的に遮る「隔壁」の存在。
- ・ 内庭のレベルよりも下に掘り下げられた床と通路が段あるいは傾斜

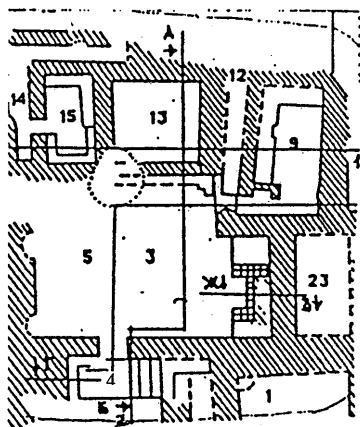
をなす。

- ・ 粘土の混ざった漆喰と下塗りが施された壁には壁画が発見された。
- ・ 壁画パネルには赤色が多く使われている。^{注⑨}
- ・ 床には火の痕跡がある。

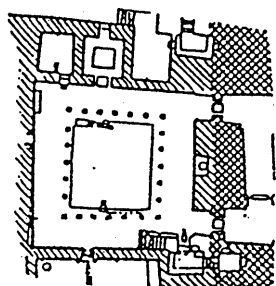
DT25の9号室とカラ・テパの図面を見ると、入り口を入れてすぐ左側に前室がある。DT25の場合、前室の壁はカギ状に曲がっている。この方がより一層外からの光を遮断し、内部の部屋を機密性の高い空間に保っていたと考えられる。地面が地表レベルより一段と低く設定され、内部の壁面に絵が描かれ、それを灯明の灯で浮かび上がらせることによって、閉じ込められた空間で行なわれた儀式は尚一層密度の高い荘厳さを演出するのに効果的であったことが分かる。

DT25の3号室や9号室の設計を見れば、その先駆的寺院建築であるカラ・テパとの多くの共通点を見出すことができる。(図④・図⑤)

次にDT25から出土した塑像について述べていこうと思う。最初に塑像が発見されたのは3号室に続く2号室の穴の中であった。その中から塑像の断片、例えば頭部の螺旋・装身具・金箔の付着した胴体の一部などが出



図② ダルヴェルジン・テパ平面図
(中央が3号室)

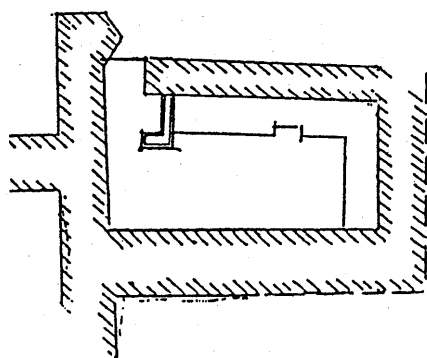


図③ カラ・テパ平面図

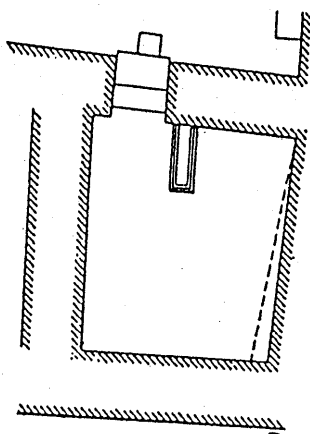
土している。人間の倍のスケールの像やインド的な造形のワニのようなマカラも出土している。

多くの像が出土しているのは、内庭を形成する3号室である。東と北の壁に付いた壇の台座に安置されていた二十五体の塑像、多くの壁画の断片も発見された。この3号室に特徴的なことは、内庭の壁に沿った部分や龕の中に多くの塑像が安置されていたことである。出土した塑像を大別すると二十体以上の仏陀像、菩薩像、仏教に関係した人物の像などである。また、中には石膏像やその断片も出てきた。

まず、仏像から見ていこう。まず3号室の東側の壁を占めていた龕にあった泥石膏の下部だけの座像である。これが恐らく本尊かと思われる。足の部分の幅が1.8mあり、マントをまとっている。左手で衣の端を持っている。手の大きさからしてこの像は相当大きかったと思われる。恐らく高さ3mはあったであろうと想像される。頭部は座像の右側に顔を下にして発見された。細部を修整された型押しによって造られた像で、半眼の目で小さな口をして柔らかな顔の表情をしていた。顔と髪にはそれぞれ白と黒の顔料が残っていた。



図④ DT 25の9号室



図⑤ カラ・テパの部屋

南側の東南の隅にも塑像の座像があったがこれは断片が乏しい。この像の左足付近の穴の中から泥石膏造りの仏頭が発見されている。

3号室の東北隅からは、左足に重心のかかった仏立像が出てきた。腰から上はない。頭部の上半分も欠けているものが足の近くで見つかった。次に菩薩像であるが、3号室では六体が発見されている。二体の菩薩像が東南の龕の両側に設置されていた。さらに3号室の北側の壁に置かれていた破損の少ない二体の菩薩像が床面に倒れていた。

^{注②} 拙稿に写真掲げておいたが、特徴のある菩薩像もこの3号室の南壁側で発見された。筆者はこの像をタシケントにあるハムザ記念芸術研究所で拝見した。赤味を帯びた塑像で顔には白い顔料がかけられていた。他に胸部や衣服さらに宝冠は赤く彩色され、頭髮は黒く塗られていた。顔は型押しで造られ、衣服などと共に手で修整され造形されている。顔は全体ふくよかで、特に顎の張りが大きく造作され、口は小さい。眉間に白毫があり、金の装飾がはめ込まれている。短い髪の上には宝冠を被っている。頭頂部は破損している。右肩には衣がかかり、それをたくし上げている。下半身はインドでドーティと呼ばれる下裳を付けて、その端を腰にたくし上げている。インドでは今日でも男性の日常的なスタイルである。さらに顎には見事な頸飾りを付けている。

同様の造形(写真③)は他にも見られ、この像も筆者はハムザ記念芸術研究所で拝見した。かなり破損はしていたが、それらの破片は寄せ集められて接合されて全体が分かるようになっていた。南壁の菩薩像は頭部の大部分が破損していたが、この像は細長い葉紋で造られた宝冠が、破損部分を接合するとはほぼ完全な形で残されていた。彩色の痕跡も残っており、顔はバラ色で、頭髮は黒く塗られた跡があった。また、頸飾りも大変厚厚で

複雑なものを付けていた。それは三連から成り、小さい球や細長い管玉を連ねたもので、体の中央と肩とでメダイヨンに固定されている。さらに両肩からもう一本の頸飾りが垂れている。下裳のドーティは六弁のロゼットをあしらったベルトで留めてある。この像の高さは210 cmであった。

さらにもう一体、大きな菩薩像(写真④)が発見されている。高さは226 cmで、この像はDT25で最大のものである。しかしこの像は破損が激しく、膝下と肘から先の手は残っておらず、顔の部分も多くは破損していた。但し、残された衣服の多彩な彩りや独特の装飾品から見て、3号室での重要な菩薩であったことが窺われる。

総してDT25の像はガンダーラの菩薩像の伝統を踏襲していると考えてよいだろう。きっちりと引き締まった容貌と豪華な宝冠、偏袒右肩の胸元に豪華に飾られた頸飾り、さらに帯で留められた下裳ドーティなどが挙げられよう。

塑像の最後は、供養者或いは仏教に関係した像について述べる。造られた像は仏陀や菩薩ほど大きなものではないが、それでも70 cm～100 cmほどの高さの像も含まれている。これらの像は一般に僧伽と呼ばれ、出家した比

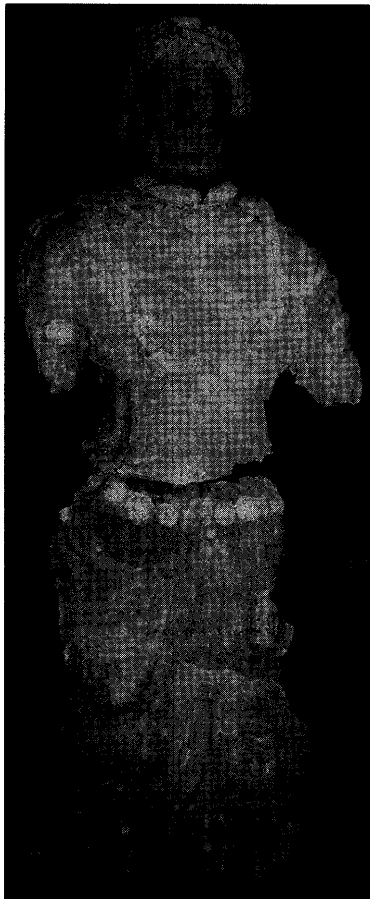
丘や比丘尼に対して供養をする仏教徒で構成された人々の像であったと思われる。

大きい像として三体出ている。一体目は81 cmの像で、塑像の上に石膏をかけたもので、表面が赤く彩色されている。衣服は長い裾のようなものかズボンのようなものであろうか、幅の広い帯を付け、その下に留め金が付いている。

頸飾りを付けた第二の像(写真⑤)は86 cmの高さである。頭部と両脚は欠損している。頸元に大変立派な三連の頸飾りをしている。第一の像と違ってこの像は石膏の層が厚い。この像が特徴的なのは、厚い胸板の中央に大きなメダイヨンが附着していることである。真ん中にハート型の装飾がある大変大きなものである。

第三の像は、高さが110 cmある。同じく塑像と石膏で造形され、赤い彩色がされている。衣の襷にはメダイヨンが付けられている。顔には石膏層が残っていなかったが、頭の一部に石膏の装飾が残っていた。巻き毛はカタツムリ型である。

その他には、何かによって押しつぶされた菩薩像の頭部や赤く彩色され



写真③ 菩薩像



写真④ 菩薩像

た頭部が出土している。また、唯一の女性像として胴部のみが残っている。トルソーとしての形しか残っていない。壁にぴったりと付いていて、まず漆喰で壁が造られた後に造形された像で、背中に漆喰の跡が残っていた。やや大雑把な造りで、上半身は裸体であり腰から下は下裳で覆われている。彩色は残っていない。

頭部は四つ発見された。総てそれぞれの表情が面白い造形として表現されている。一つ目は若者の頭部(写真⑥)である。顔の左側がやや吊り上がっており、大きく見開かれた目と小さい鼻、波打つ髪に太い鉢巻きを締めている。顎はふっくらとしている。二つ目は戦士の頭部である。端正な面長の顔の表情が促されるが、表面の劣化が激しい。兜を被り、その中央に縦の隆起があるデザインである。三つ目は恐らく天部の頭部で鼻と口が欠落している。髪の毛は螺旋で、六弁と五弁から成る冠を被っている。四つ目は供養者の頭部(写真⑦)で、口髭を蓄えている。頭には編んだような帽子を被っている。

DT25第二仏教寺院からは、その他にも数多くの魅力的な出土品が発見されている。例えば衣の端を軽く摘んでいる左手やデザインされた大小の



写真⑤ 頭飾りを付けた像



写真⑥ 若者の頭部

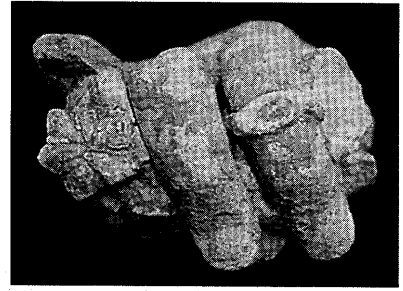


写真⑦ 供養者の頭部

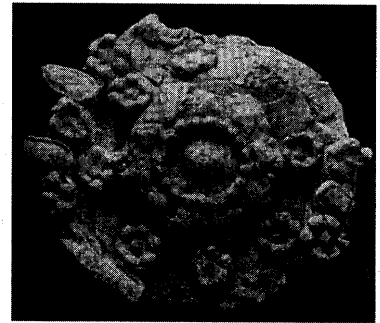
指輪を人差し指や薬指にはめている右手(写真⑧)や、小さなメダイヨン(メダイオン)を付けた足の指や、六弁の花弁を持った同心円状のものメダイヨン(写真⑨)などそれぞれが細かに細工されて美しい。多くの断片には彩色が残り、中には金箔の残存が認められるものもある。

〈注〉

- ① 「中央アジアとその周辺の宗教文化 V」 早田啓子 昭和女子大学「学苑」平成十七年三月号
- ② 「中央アジアとその周辺の宗教文化 II」 早田啓子 昭和女子大学「学苑」平成十五年八・九月合併号
- ③ 『大正新脩大藏經』 第五一卷 八七二頁上・中
- ④ 『シルクロードの残映』 杉山二郎編著 講談社 一九八八年 一二二頁
- ⑤ 『ダルヴェルシンテパDT25 1989~1993 発掘調査報告』 創価大学シルクロード学術調査団 創価大学 一九九六年 一頁
- ⑥ 注⑤資料 二頁
- ⑦ 注⑤資料 二頁
- ⑧ 注②資料に同じ



写真⑧ 指輪をはめた手



写真⑨ 六弁文様

- ⑨ 注⑤資料に同じ
- ⑩ 注①資料に同じ
- ⑪ 注⑤資料 八三頁
- ⑫ 『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』加藤九祚著 シルクロード学術センター
一九九七年 三四頁
- ⑬ 注⑤資料 八六頁
- ⑭ 注⑫資料 三五頁
- ⑮ 『南ウズベキスタンの遺宝』E・V・ルトヴェラーゼ、加藤九祚著 創価大
学出版会 一九九一年 五一頁
- ⑯ 注⑤資料 八六頁
- ⑰ 注⑤資料 八六頁
- ⑱ 注⑤資料 八七頁
- ⑲ 注⑤資料 八七頁
- ⑳ 注②資料に同じ

〈写真〉

- ① ダルヴェルジン・テパのツイタデリ（筆者撮影）
- ② 遺跡にあるイスラム教の墓（写真上部）（筆者撮影）
- ③ 菩薩像（筆者撮影）
- ④ 菩薩像『ダルヴェルジンテパDT25 1989～1993 発掘調査報告』 九頁
図11（原No.80）
- ⑤ 頸飾りを付けた像 同右 一〇四頁 図6（原No.39）
- ⑥ 若者の頭部 同右 八頁 図7（原No.21）
- ⑦ 供養者の頭部 同右 一〇五頁 図13（原No.67）
- ⑧ 指輪をはめた手 同右 一〇五頁 図15
- ⑨ 六弁文様 同右 一〇五頁 図17

〈図〉

- ① ダルヴェルジン・テパDT25平面図（部分） 『ダルヴェルジンテパDT25
1989～1993 発掘調査報告』 八三頁 図2
- ② ダルヴェルジン・テパ平面図 同右 九〇頁 図12
- ③ カラ・テパ平面図 同右 九〇頁 図13
- ④ DT25の9号室 同右 九〇頁 図14
- ⑤ カラ・テパの部屋 同右 九〇頁 図15

（そうだ けいこ 人間文化学科）